

# 『ザクセン宝鑑』に見られる表現技法 — 中高ドイツ語叙事作品との比較から — その2 否定表現について

武市 修

## 1. はじめに

前稿では、『ザクセン宝鑑』*Der Sachsenspiegel*の序文に見られる表現の特徴を中高ドイツ語作品の用例と比較して、主として除外文、縮約形、曲言法、不定代名詞について検証した。本稿では、同作品<sup>1</sup>に見られる否定表現について見てみよう。

日本語の「私はあなたにそんなことはしないように忠告します」は今日のドイツ語では“*Ich widerrate Ihnen, das zu tun.*”、「彼は私にその本を買わないように言った」は“*Er riet mir ab, das Buch zu kaufen.*”で *das nicht zu tun* や *das Buch nicht zu kaufen* は誤りだとされる。ところが中高ドイツ語の諸作品ではこのような表現の場合、ふつう次の例のように、否定が加えられる（下線は筆者、以下同様）。

- 1) ouch enwart dâ niht vergezzen  
wiri heten alles des die kraft  
daz man dâ heizet wirtschaft. (Iw. 364-66)  
また、そこにはおもてなしと呼ばれるものがすべて  
たっぷり我々に用意されることが  
忘れられてはいませんでした。

上例の最初の2行は今日のドイツ語では、ふつう“*auch war da nicht verabsäumt, daß wir von alledem die Fülle hatten*”のように従属文には否

---

1 本稿でも、取り敢えず序文の部分のみを考察の対象とする。

定は現われない<sup>2</sup>。ところが中高ドイツ語の文中には2行目 *wirn* の *n* (*ne* の語尾が欠けた形) のように、今日の語感からすると不要に思われる否定辞ないし否定語が頻繁に見られる。その他、上例の1行目の *en* と *niht* のように同一文内に否定が重複して現われる現象も多く、その場合二重否定が相殺されて肯定になることはない。このように、中高ドイツ語の否定表現は今日のドイツ語と異なるところが非常に多い。そこで先ず、本稿の主題に入る前に、中高ドイツ語の否定表現全般について概観しておこう<sup>3</sup>。

## 2. 中高ドイツに見られる否定表現

古高ドイツ語では否定はゴート語と同じく否定辞 *ni* で表わされたが、10世紀頃から弱化して *ne* となり、これが前後の語と前接したり後接したりして融合形として用いられるようになる。それとともに、元来は *ni* および *ne* と名詞 *wiht* が融合して作られた *niht* が否定の強調のために付け加えられるようになり、やがて *niht* と *ne* の組合せがふつうになる。そして *niht* と並んで、否定辞と代名詞や副詞の融合形である *nieman*, *nie*, *niemer*, *niender*, *niergen* などの他の否定語も用いられるようになる。そして遂には元来否定の強調として添えられた *niht* などが単独で用いられ *ne* は消えてしまうことになる<sup>4</sup>。もっともこの現象は決して直線的に進んだのではなく、とくに中高ドイツ語の文学では、詩人たちはスムーズな流れの詩行が行末で韻を踏む韻律形式を守りつつ、彼らの美的世界を描き出すのにさまざまな表現の可能性を駆使した。

中高ドイツ語では *ne* と *en* の二つの否定辞があり、原則として *ne* は直前の語と前接し、*en* は直後の語と後接して続け書きされる。この *ne*

2 Vgl. Paul/Mitzka, § 340.

3 以下の叙述は Hermann Paul: *Mittelhochdeutsche Grammatik*, 25. Aufl. [=Prell]; 19. Aufl. [=Paul/Mitzka] および G. F. Benecke/W. Müller/F. Zarncke, *Mittelhochdeutsches Wörterbuch* [=BMZ] の記述を中心に、様々な刊本の例も参照しながら筆者がまとめたものである。

4 ただし、この *ne* は今日でも低地ラインの民衆語には残っているということである。

と en は単に文字が入れ換わったものではなく、歴史的に見ると<sup>5</sup>、en は古高ドイツ語で ni が次に来る ist に後接・融合して nist となった語形に由来する。この nist がやがてスペイン語の nano の代わりに用いられた enano などの類推から enist の形としても現われ、12世紀の後半になるとこの en の使用が広がる。en は母音の前だけでなく子音の前でも現われるようになり、er enist や ich enizze と並んで wir entuon や noch enneic という融合形も見られるようになり ne よりも広く用いられることになる。

一方、本来の否定辞 ne の方は sine sprach, dane vander, jane sol などのように子音で始まる語の前でのみ現われ、先行する母音で終わる語に前接したが、時には子音で終わる語のあとでもその子音が脱落し、ich enweiz や ich enmac の代わりに ine weiz や ine mac という融合形になることもあった。

## 2.1. 否定辞のみによる否定表現

### 2.1.1. 独立した文における場合

いわゆる話法の助動詞および lán が不定詞や副文を伴わないで、前後の関連から不定詞を補うことができる場合や tuon が代替表現として用いられる場合などはたいがい、否定辞単独で否定が表わされる。また、それらの語が不定詞を伴う場合も稀に ne あるいは en 単独で否定されることもある。いくつか例を見てみよう。

#### 2) man hiez der boten einen für Kriemhilde gân.

daz gescach vil tougen; jane torstes' über lût, (Nib. 224, 2f.)

使者たちの一人がクリエムヒルトの前に行くよう命じられた。

それは秘密裏になされた。公にする訳にはいかなかったのだ。

#### 3) „Nune welle got von himele“, sprach dô Gêrnôt. (Nib. 2105, 1)

『まっぴらご免こうむります』とその時ゲールノートが言った。

#### 4) in der werlte ist manec man

valsch und wandelbære,

---

5 Vgl. Grimm Gr. 3, 710-712.

der gerne biderbe wære,  
wan daz in sîn herze enlât. (Iw. 198-201)  
世間には不実で信頼できない人が  
多い。彼らもできれば  
立派な人間になりたいのだが、  
ただ心がそうさせないのです。

- 5) do engetorst ich vrâgen vûrbaz: (Iw. 3020)  
それで私は敢えてそれ以上尋ねなかった。

2) は *turren* の例である。mhd. *turren* は元来過去現在動詞であり nhd. *wagen* の意味であるが、今日のドイツ語には残っていない。3) の *welle* は *wellen* の接続法現在で希求法であり、「天の神がお望みにならないように」ということから、ここでは『ご免こうむる』という意味の決まり文句である。4) の例は形式的には *daz* 文だが、内容的には独立しているので、BMZ にはこの個所の用例として挙げられている<sup>6</sup>。5) は話法の助動詞 *turren* に前綴り *ge-* の付いた形で不定詞を伴っているが、否定が *en* だけの例である<sup>7</sup>。

さらに *wizzen* と *ruochen* は目的語が疑問文の形で続く場合、否定辞のみで否定されることが多い。

- 6) er erkand in bî dem mære,  
und enweste doch wer er wære. (Iw. 5697f.)  
彼はその話を聞いてその騎士のことだと分かったが、  
しかしそれが誰なのか知らなかった。
- 7) dô sî alsô stille sweic,  
daz begund im starke swâren,  
unde enweste wie gebâren, (Iw. 2250-52)  
彼女がそんな風に黙っていたので、

---

6 BMZ, II<sup>1</sup>, 321<sup>b</sup>, 2ff.

7 *ander*, *mære*, *baz*, *vûrbaz* を含む文では *wizzen*, *ruochen* だけでなく他の動詞も否定には *ne* あるいは *en* だけで十分であるということである。Vgl. BMZ, II<sup>1</sup>, 322<sup>b</sup>, 49ff.

彼はとても心が苦しくなり  
どのように振舞ったらよいか分からなくなった。

- 8) sine wessen, wem ze klagene diu ir vil grœzlichen sêr.  
x x | ẋ x | ẋ x | ẋ x|ẋ^| (Nib. 2088, 4)  
彼らは自分たちの甚だしい苦しみを  
誰に訴えればいいのか分からなかった。
- 9) sine weiz von iu, geloubet mirz,  
zer werlte mêre wan daz irz  
der rîter mittem lewen sît. (Iw. 8013-15)  
あの方はあなたについて、私の話を信じていただきたいのですが、  
あなたが獅子を連れた騎士であること以外には  
まったく何もご存じありません。
- 10) ouch enruoch' ich, waz mich nîdet des kûnec Etzelen wîp.  
エツツェルの妃がどれほどわしを (Nib. 1782, 4)  
憎もうと構うものか。
- 11) jane ruoche ich, ob ez zûrne des kûnec Etzelen wîp. (Nib. 1886, 4)  
エツツェル王の妃がそれに腹を立てようが構うものか。
- 12) sonne ruoch ich, ist daz iemen liep oder leit: (Nib. 110, 2)  
それが誰の喜びになろうが苦しみになろうが私にはどうでもよい。

6) は wizzen が間接疑問文を目的語に取る例で、過去の主文に従属するので、従属文の動詞が時制の一致で接続法過去 wære になっている。7) は今日のドイツ語には見られない疑問文が縮合した例で、Paul/Mitzka ではこれを er enweste wie er gebâren solde と er enweste gebâren の異なった構文の混合したものと説明している<sup>8</sup>。8) は wizzen が動名詞を取る珍しい例である。これは当該の行の下に韻律符号を示したように、リズムを整えるための苦肉の策ではないだろうか。9) は wizzen が疑問文でない目的語を取った例であり、5) の例文と並んでここは mêre を含んだ文で、否定は ne だけで十分である。10) から12) は ruochen が疑問文を目的語に取る例である。そのうち12) は間接疑問文を導く接続詞

8 Vgl. Paul/Mitzka, § 391.

ob が省かれた稀な例である。

ところで、辞書には上で見た動詞以外にも、短い対照的な内容を対比する表現の場合には ne あるいは en のみによって否定されるとして次の例を挙げている。

13) ouch enist ez von den schulden sîn:

ez ist von den unsælden mîn. (Iw. 4067f.)

しかしそれはあの方のせいではなく

私の不運のせいなのです。

『イーヴァイン』の編者は巻末の異本参照資料 (*Lesarten*) の中でこの個所について “oh nist (ist *BDd*) iz niht *ABDd*, auch ist nit *b*, ez (ezen *a*) ist niht *Ea*” と異本間の異同を示し、ここでは ouch enist ez と ez ist で対照をなすようにあえて niht を削除したと述べている<sup>9</sup>。この作品の第6版まではこの表現が踏襲されたが、第5版からの校訂者ヴォルフ (Ludwig Wolff) は第7版でこれを変更して写本に従い、ouch enistz niht von den schulden sîn (4067) と niht を入れている。

文法書にも述べられているように<sup>10</sup>、厳密な本文批判を経た校訂版では刊本と異本参照資料を比較して調べることも必要になることがある。このような写本の操作が適当かどうか判断の分かれるところであるが、対照的内容を表わす個所で niht が現われないことは編者も用例を挙げて説明しているとおり、中高ドイツ語文学ではよく見られる表現形式のようである。

2.1.2. 従属文に見られる ne あるいは en のみの否定表現

niht を伴わない従属文中で否定辞 ne, en が接続法と結びついて、上位文とのさまざまな従属関係を示す。前稿で ne, en を伴う接続法による除外文について紹介したので、ここではそれ以外の用法について確認しよう。先ず、上位文の ander と関連して *auffer dass* や *als dass* の意味にな

---

9 *Iwein*<sup>6</sup>, S.466.

10 Vgl. Prell, § S143.

る例から見よう。

- 14) man enmac im anders niht gejehen,  
er enphlæge ir alsô wol  
als ein getriuwer bruoder sol  
siner lieben swester. (Gregor. 296-99)  
彼については、彼女に対し、  
誠実な兄が愛する妹に対して  
なすべき限りを尽くして優しく面倒をみた  
と言うより他に言いようがない。

ノイマン (F. Neumann) はここに “*man kann von ihm nichts anderes sagen, als daß er sich um sie sorgte ...*” と注解している<sup>11</sup>ように、今日であれば *nichts anderes als* としか表わせないような結びつきも、*ander* と *ne* + 接続法の従属文で表わされた。なお、*enphlæge* は例 1) と同じように否定の意味ではない。次の例の *ern* の *ne* も同様であり、このような冗語的な否定については次項で詳しく述べる。

さらに次の例のように *ander* なしでもこのような結びつきが可能である。この個所にバルチュ (Karl Bartsch) も *anderes als daß* の意味であると注を付けている<sup>12</sup>。

- 15) waz welt ir daz Gâwân nu tuo,  
ern besehe waz disiu mære sîn? (Parz. 349, 28f.)  
この話がどんなことなのか見てもらう以外に  
あなた方はガーヴァーンに何をしてもらいたいでしょうか。

また、次の例のように先行する上位文に *sô* や *solch* があり、それと関連することもある。

---

11 Vgl. F. Neumann, *Gregorius*, Anm. zu 296/97.

12 Vgl. K. Bartsch (Hrsg.): *Wolframs von Eschenbach Parzival und Titurel*, Anm. zu 7, 359.

- 16) *irn habet niender selhen helt*  
*ern lâze iuch nemen swen er welt,*  
*ê er iu den brunnen bewar. (Iw. 2163-65)*  
あなたが望む方を夫にさせないで  
むしろ自分であなたのために泉を守ろうとするほどの  
勇士をあなたはどこにもお持ちではありません。

従属文における *ne* + 接続法は否定の上位文のあとで、さらに、対象あるいは行為の性質からの影響を表わすために用いられ、新高ドイツ語で表わすと *dass ... nicht, ohne ... dass, ohne ... zu* 不定詞あるいは関係文で表現されるような結びつきを示すことがある。

- 17) *dehein koufman hete ir site, / ern verdurbe dâ mite: (Iw. 7197f.)*  
どんな商人でも彼らのやり方をすれば必ず身を滅ぼしただろう

この例では *dehein* は否定の *kein* の意味で、直訳すれば「どんな商人でもそれによって身を滅ぼすことなしには、彼らのやり方をもたなかっただろう」である<sup>13</sup>。ふつうこのような複合文では従属文が *ne* + 接続法であるが、次の例のように時に否定を伴わないこともある。

- 18) *daz man der vremden harte wênic vant,*  
*si trüegen ir gesteine oder ir vil hêrlîch gewant. (Nib. 1324, 3f.)*  
それで異国の者たちの中には彼女から贈られた宝石や  
すばらしい衣装を身に付けていない者は誰もいなかった。

---

13 上位文の *hete* も従属文の *verdurbe* も接続法過去でクラーマー (Th. Cramer) は *Hätte ein Kaufmann ihre Methode gehabt, so hätte er damit bankrott gemacht* と訳し、ヴェールリ (M. Wehrli) は *Hätte ein Kaufmann wie sie gehandelt, er wäre zugrunde gegangen* と訳しているところからすると、ここは非現実の過去を表わしていると解することができる。接続法の従属文と上位文の間には元来は時制の一致があり、例6)のように接続法過去は元来は過去の文に従属する副文に現われたが、次第に、過去を表わすのに今日の接続法第二式の過去も用いられるようになり、中高ドイツ語期は接続法の時制についてははっきり断定できないところがある。



上例の2行目は写本 A と C では sine trügen と否定が現われているが、B 写本ではこの否定辞がない。主として B 写本に基づくバルチュの版ではここは B 以外の写本から sine を採り、文法書はそれに従って否定辞の付いた sine の形を挙げている<sup>14</sup>。しかし、バルチュの版を引き継いだデ・ボーア (Helmut de Boor) はより B 写本を重視して元の版が B 写本以外から採った個所の多くを B に戻し、ここも sine を si に改めている。

なお、この例には上位文に明らかな否定語が見られないが、wênic が *nichts* の意味の否定<sup>15</sup>で、ここでは *der vremen harte wênic vinden* で *unter den Fremden keinen finden* の意味になる。wênic などによるこのような否定については後にまた検討する。

本来は ne + 接続法の従属文であるはずなのに、否定が現われない例をもうふたつ見てみよう。

- 19) *nie keiser wart sô rîche, der wolde haben wîp,*  
 im zæme wol ze minnen der rîchen kûneginne lîp. (Nib. 49, 3f.)  
 たとえどれほど強大な皇帝にとっても、妻を迎えようとすれば、  
 この富貴な王女を愛することはまことにふさわしいことだった。
- 20) *Nu heizet mich ez lêren, sît ich waschen sol.*  
 ich weiz mich niht sô hêre, ich kûnde ez gerne wol,  
 私に洗濯をさせようとするのなら、 (Kudr. 1056, 1f.)  
 さあ、その仕方を私に教えるようにお命じなさい。  
 私は自分がそれを進んですることができないほど  
 高い生まれでないことは心得ております。

先の例と同様、19) の2行目 *zæme* にも C 写本では否定辞 *en* が付き、B 写本にはそれがない。ここは元のバルチュの版でも *en* のない B 写本に従い、デ・ボーアはもちろんそれを踏襲している。上の例を構文に従って訳せば、「妻を迎えようとするいかなる皇帝でも、その富貴な王女

14 Vgl. Paul/Mitzka, § 339.

15 Vgl. Ebenda, § 338 u. § 314.

を愛することがまことにふさわしくないほど強大になったためしはない」ということで、本来、否定が必要である。ところで、主文に *nie* を含むこのような複合文では *Nhd.* では従属関係を逆にして訳す方がよい場合があると、同じ文法書の個所に説明されているので、ここには上の訳を添えた<sup>16</sup>。

20) は『クードルン』<sup>17</sup>からの用例である。ここは、ハルトムオトに連れ去られて結婚を迫られるが、どうしても首を縦にふらないクードルンがいじめられる場面のひとつである。彼女のかたくな態度に腹をたてた彼の母親ゲールリントはあれこれと意地悪をして彼女を苦しめ、ついには洗濯女の仕事までさせようとする。上の用例は、それに対してクードルンが毅然として、敢えてその仕打ちを受けようとして言った言葉の一節である。編者はこの個所に注を付け、ここは *enkünde* と読むべきで、その意味は *ich bin nicht so edel geboren, daß ich es nicht gern lernen würde* であるとして、Paul/Mitzka § 339を参照するよう指示している。

### 2.1.3. 冗語的な否定

先行する上位文が否定文であったり、否定がなくとも意味上否定的な内容を表わす場合、それをより詳しく規定する補足的な従属文が接続法で表わされ、本稿の用例1)に挙げたように肯定的な内容であるにもかかわらず、原則として否定辞によって否定される。ここではそのような一見不必要に思われる冗語的な否定表現について詳しく見ていこう。先ず、*läzen* および前綴りの付いたその複合語に従属する文で、

#### 21) *Der arme vischære niht enliez*

x |x̄ ~ ~ | x̄ x | x̄ x | x̄ ^

16 そこには本来の構文である *ne*+接続法の用例がいくつも挙げられており、否定辞の付かない例はないが、筆者がこれまで読んだ中でこのような構文でありながら *ne* のない例も時に見られ、これらの用例もそのひとつである。他には R. v. Zweter 228, 5; W. Gast 1977f., 5170などがある。

17 *Kudrun*. Hrsg. von K. Bartsch, neue ergänzte Ausgabe der 5. Auflage, überarbeitet und eingeleitet von K. Stackmann, Wiesbaden 1980 (Deutsche Klassiker des Mittelalters = Kudr.).

er entæte als in sîn herre hiez. (Gregor. 1107f.)

貧しい漁師は僧院長が彼に命ずるとおりに  
することを怠らなかつた。

22) sît ir von schulden fürhtet dâ den tôt

in hiinischen rîchen, solde wirz dar umbe lân,

wir ensâhen unser swester, daz wære vil übele getân.

そなたがああのフンの国で死を恐れるのは (Nib. 1462, 2-4)

当然だが、そのために、もしわしらが妹に会いに行くのを  
止めれば、いかにもまずいことであろう。

23) desn ist dehein mîn gast erlân

erne müese sî bestân; (Iw. 6599f.)

いかなる客人も彼らを相手に  
戦うことを免れません。

21) は *unterlassen* の意味の *lâzen* を定動詞とする否定された主文に従属する副文の例であり、*entæte* の *en* は冗語的否定である。また、主文自体が *niht* と *en* によって二重に否定されているが、もちろんこれで否定が相殺される訳ではなく、否定の強調であろうが、あるいは行の下に韻律を示したように、ここは行のリズムを整える必要からこの表現になっているとも見られる。22) は同じ意味の *lâzen* の縮約形 *lân* の例である。ここには上位文に否定はないが、*lân* が21) と同じく「しない、取り止める」という否定的な内容であるため、それに従属する文が「妹に会う」という肯定的な内容であるにもかかわらず *en*+ 接続法になっている。2行目の後行が、定動詞が文頭に置かれた条件文で、3行目の後行がそれに対する帰結文である。3行目の前行が前の条件文に従属し、*lân* の目的語になっており、*wirz* の *ez* がそれを先取りしているという構文である。23) では2行目が、*nhd. erlassen* に相当する *erlâzen* の縮約形 *erlân* が受動で表わされた上位文に従属する副文である。*erlassen* は「人<sup>3</sup>に事<sup>4</sup>を免除する」だが、*erlân* は「人<sup>4</sup>に事<sup>2</sup>を免除する」という構文になり、ここは目的語に当たる従属文を2格の指示代名詞 *des* で先き取りしている。

*unterlassen, abhalten, ablehnen* の意味の動詞以外に、さらに、*leugnen*,

*lügen, zweifeln* を意味する動詞、時には、その意味の名詞に従属する副文も同じ構文をとる。その用例をふたつ挙げてみよう。

- 24) *nune sol dich niht betrâgen,*  
*dune sagest mir waz dû suochest.* (Iw. 520f.)  
 さあ、お前が何を探しているのか  
 嫌がらずに私に話してくれ。
- 25) *des enist zwîvel dehein,*  
 | x̣ x̣ | x̣ x̣ | x̣ x̣ | x̣ ^  
*als schiere so er des strîtes gert,*  
*ern werdes vür mich gewert.* (Iw. 916-18)  
 彼が戦いを求めればすぐに  
 私より前にそれを許される  
 ということは疑いない。

24) では動詞 *betrâgen* は非人称構文で、人の 4 格とふつうは事の 2 格とともに用いられるが、ここは 2 格に代わる副文を取って、それを先取りする代名詞が現われていない。23) あるいは 25) では副文を先取りする 2 格の指示代名詞が示されているが、この例のようにそれは必ずしも必要ではない。副文を先取りする指示代名詞あるいは人称代名詞の有無は行のリズムとも関係があるようである。ちなみに 25) の 1 行目の韻律を示したが、指示代名詞 *des* がなければ行のスムーズな流れが作れない。25) は動詞ではなく否定的内容を表わす名詞 *zwîvel* に従属する副文の例である。

上で見てきたように、冗語的な否定辞が現われるのは、原則として、否定された文あるいは否定的な内容の文に従属する、接続詞で導かれない接続法の副文であるが、稀に、このような接続詞のない接続法の否定文と等価の表現として、否定のない直説法の *daz* 文が現われることがあるとして、文法書に次の用例が挙げられている<sup>18</sup>。

---

18 Prell, § S147, 3.

- 26) dô dûhte von im vollen grôz  
daz er durch sîn houbet blôz  
von ungewarheit niht vermeit  
daz er schône in reit / ... (Er.2714-17)  
彼のこと何より素晴らしく思われたのは  
頭に兜もかぶらず、危険をものともせず  
彼らに加勢すべく堂々と敵の中へ  
馬に乗って切り込んで行ったことである。

ここは直訳すると、「その時彼のことこの上なくすばらしいと思われたのは、彼が頭に兜を付けていないからといって、敵の中へ堂々と馬に乗って切り込むことを、危険だと思ってためらわないで行なったことである」となり、4行目の *daz* 文はその前の *daz* 文に従属し、動詞 *vermeit* の目的語である。この *vermiden* は *unterlassen* の意味で、従属文は本来なら *ne* + 接続法で表わされるところであるが、ここは接続詞 *daz* に導かれ、動詞が直説法になっている。これは *vermeit* と押韻する必要から直説法のこの形になっているのかどうか、他の用例を集めて検討すべきところであるが、今後の課題としておきたい。

## 2.2. 否定の重複

上で見た用例の中にも否定辞と他の否定語による二重否定がいくつか見られたが、ここでその現象についてより詳しく検証しよう。文法書には否定の使用形態<sup>19</sup>の項に否定辞と他の否定語の組み合わせとして先ず *ne* と *ni(e)ht* を挙げ、次のように述べられている。

中性の不定代名詞 *niht* は古高ドイツ語後期の時代から否定の不変詞になった。元来は *in keiner Weise* の意味の様態を表わす副詞的4格であり、これが *ne* による単一の否定に強調として付け加えられることがあった。12世紀以来 *ne* だけによる否定は動詞表現の

---

19 Vgl. Prell, § S144.

特定のタイプに限定されるようになり、一方、音声の弱い *ne* は消えていく。もっとも、この展開はまっすぐに進む訳ではないが、個々のテキストにおける用法についての正確な統計的資料はない。

そしてそのあと *ne* と *nieman* および *ne* と *nie* を挙げ次のように説明されている。つまり、これらの場合は否定語と定動詞の前後の位置関係がある傾向を示しており、a) *nieman*, *nie* が定動詞より前にある時は、特定の詩人、とくに、ハルトマン、『ニーベルンゲンの歌』およびゴットフリートで *ne* が欠けていて、b) 定動詞が先行する場合は意味をはっきりさせるため *ne* による否定が現われる傾向がハルトマンにはっきり見られる。しかしいずれにしても明らかに *ne* が欠落する方向へと進んでいる、ということである。

文法書にはさらに否定辞以外の否定の重複の項目を設けて、6例挙げられている。そのうちの2例を次に示そう。

27) *ichn gehôrte bî mînen tagen*

*selhes nie niht gesagen*

|x̣ x |í |x̣ x|ú ㄥ

*waz âventiure wære: (Iw. 547-49)*

私はこれまで冒険とはどんなものか  
そんなことを人が話すのを  
決して何も聞いたことがない。

28) *daz umbe ir reise und umbe ir vart*

*nie nieman nihtes inne wart. (Trist. 9499f.)*

x | x̣ x | x̣ x | x̣ x | x̣ ㄥ

それで彼らが出かけたことは  
決して誰も何も気が付かなかった。

27) は否定辞を含めると三重否定であり、28) は否定語による三重否定である。これはきわめて稀な例で、『このような否定は明らかに特別な強調であり、ゴットフリートの三重否定はありうる限りの可能性を使っ

た言葉遊びの印象を与える』<sup>20</sup>が、それぞれ当該の行の下に韻律符号を示したように、これらの場合も、押韻文学なるが故の表現ではないだろうか。

否定語と融合した否定辞 *ne* が形式的にも残っている否定語 *niene* についても触れておかねばならない。*niene* は *nie* および *niht* と *ne* の融合形で、強い否定を表わし、*nie* との融合形は副詞 *nicht* を意味し、*niht* との融合形は不定代名詞 *nichts* の意味である。次にいくつか用例を検討しよう。

29) und dô ich niene wolde

x | ẋ x | ẋ x | ' | ẋ ^

noch belîben solde, (Iw. 385f.)

そして（その城に）それ以上留まるつもりもなく  
また、留まる訳にもいかなかったので、

30) er sprach „niene tuot,

der sol ouch mich ze vriunde hân.” (Iw. 484f.)

彼は言った、『私に何も危害を加えないものは  
私を友とすることもできるのだ。』

31) si heten noch manegen recken, des ich genennen niene kan.

x | ẋ x | ẋ x | ẋ x | ẋ ^

彼らはさらに、一々その名を挙げられない (Nib. 10, 4)

ほど多くの勇士を召し抱えていた。

29) は *nie* + *ne* からの形で否定の強調である。30) と 31) は *niht* + *ne* の融合形で、30) の *niene* は 4 格の副詞的用法と見られるが、31) は前行の *manegen recken* を先行詞とする関係代名詞の 2 格 *des* が部分の 2 格として *niene* にかかっている。デ・ボーアもこの個所にこの *niene* は強調された *niht* であると注を付け、そのことに触れている<sup>21</sup>。

20 Prell, § S145.

21 Vgl. de Boor, Anm. zu 10, 4.

### 2.3. 反語的な否定

Nhd. *wenig* や *selten* は否定的ニュアンスの強い語であるが、完全な否定ではない。ところが Mhd. ではこれらの語に相当する *lützel*, *wēnec*, *kleine* が *nicht* あるいは *nichts* の意味で、*selten* が *nie* や *niemals*、*lützel ieman* が *niemand* の意味で否定の代用として用いられる場合がある。ただし、これらの語はもともと完全な否定を表わす訳ではないので、どちらに解釈するかは文脈から判断しなければならず、研究者によっても取り方が異なることもある。18) にこれに相当する *wēnic* が出てきたが、さらにいくつかの例を見てみよう。

32) die vrouwen ir deheiner lützel vrœliche vant. (Nib. 1250, 4)

彼らの誰もこの尊い婦人が喜ばしい

気持ちであるのを見た者はなかった。

33) ê ich iuwer enbære,

ich bræche ê der wibe site:

swie selten wîp mannes bite,

ich bæte iuwer ê. (Iw. 2328-31)

あなたを誦めるくらいなら、

むしろ女性の作法を破りもしましょう。

女性が殿方を求めるなどあるまじきことですが、

私は敢えてあなたの愛を求めます。

32) は、クリエムヒルトにフン族の王エッツェルから求婚の使者が来たあとの場面である。彼女はグンテルたちからその結婚を受け入れるよう求められ、翌日も教会のミサの場で改めて強く説得された。暗殺された最愛の夫、ジーフリトへの悲しい想いの中でのみ生きているクリエムヒルトにとっては、異教徒エッツェルとの結婚など考えられもしなかった。彼女は嬉しい気持ちになれるはずもなく、悲しみを一層かきたてられただけである。従ってこの *lützel* は *nichts* に相当する完全な否定である。

33) は、イーヴァインに夫アスカロンを殺されたラウディーネが、侍女ルーネテの説得を受け容れて国を守るために、憎んでも憎みきれな



い仇敵と対面した時の場面からの一節である。ルーネテの巧みな誘導にイーヴァインとの結婚に気持ちが傾いていたラウディーネは、命をも差し出すという勇士の態度にさらに好意をもち、自ら求婚するまでになった。この個所をヴェールリは *Wenn auch kaum je die Frau um den Mann wirbt* と訳して *selten* を完全な否定と見ていないのに対し、文法書<sup>22</sup>では *obgleich eine Frau nie um einen Mann werben soll* と訳され、クラーマーは *wenn nie eine Frau um einen Mann geworben hat* で表わしているように、*selten* は *nie* の代用だと解している。辞書には、『中高ドイツ語によく見られる反語的表現に従ってこの語 (*selten* のこと) はとりわけ、ことが決して起こらないという場合に用いられる』<sup>23</sup>と述べてこの例も挙げていることから、ここは完全な否定の代用と見る方がよさそうである。

#### 2.4. その他の否定語

中高ドイツ語には同じ語が、否定でも肯定でも用いられる場合がある。それらは形式的には肯定か否定かの区別が付かず、上で見た *selten* や *wēnec*, *lützel* などと同じように文脈から判断するしかない。そのような語のひとつ *dehein* は古高ドイツ語では常に肯定で *irgendein* を意味したが、中高ドイツ語では文中に他の否定語なしに *kein* の意味でも名詞的、付加語的に用いられるようになる。先に挙げた用例の中で17) と25) では *dehein* が単独で付加語的に、23) では否定辞 *ne* とともに付加語的に、32) では否定の意味の *lützel* とともに名詞的に用いられている。

*deweder* は肯定では *der eine oder der andere von zweien* を意味し、否定では *keiner von beiden* の意味になる。次に *deweder* が他に否定を伴う例と単独で否定を表わす例を挙げてみよう。

- 34) *Sus reit sî verre durch diu lant,  
daz sî der dewederz envant,  
den man noch diu mære*

<sup>22</sup> Prell, § 143.

<sup>23</sup> BMZ, II<sup>2</sup>, 248<sup>a</sup>, 18ff.

wâ er ze vinden wære, (Iw. 5761-64)

こうして彼女は国々を通して遠くまで馬を進めたが  
その騎士も、どこでその騎士に会えるかという情報も  
どちらも見出すことができなかった。

35) wan ein dinc ich iu wol sage,

daz ir deweder was ein zage, / ... (Iw. 1045f.)

しかし一つだけあなた方にしかと申しておきましょう、  
彼らのどちらも臆病者ではなかったということ。

34) では2行目の *der* は3行目の *den man* と *diu mære* の二つの名詞を先取りする複数2格の指示代名詞であり、性の異なる複数の名詞を指すので中性扱いとなり、*deweder* は中性4格の語尾を付けている。35) は妖精の国とおぼしき不思議な泉のある国の王アスカローンとイーヴァインの一騎打ちの様子を述べるくだりの一節である。どちらも一騎当千の勇士で、槍と剣による激しい戦いを交える二人は臆病者であるはずもなく、ここでは *deweder* は明らかに *keiner* の意味である。

本来は肯定の意味の *ih̄t*, *iēman*, *ie*, *iēnder* が *daz* で導かれる目的語文と目的文中で、さらに、*wænen* に従属する、否定を含まない接続詞のない文中でも否定を表わすことがある。その場合、従属文中の法は主として接続法である。1例だけ挙げておこう。

36) swer mîne varwe wolde spehn,

diu wæne ich ie erbliche

von slage odr von stiche.

du zürnest mit mir âne nôt:

ich pin der dir ie dienst pôt. (Parz. 299, 22-26)

誰に私の顔色を見られようとも

それが剣や槍の攻撃のため

青ざめたことなど一度もないぞ。

お前は謂れもなく私に腹を立てているが、

私はこれまでずっとお前のために尽くしてきたのだ。

この例には *ie* が二度見られる。2行目は主文 *ich wæne* が、前行の *mine varwe* を受ける指示代名詞 *diu* を主語とする従属文中に挿入されている構文である。この *ie* は *wænen* に従属する文中で他に否定がなく *nie* の意味で、*erbliche* は *erblichen* の接続法過去である。これに対し、5行目の *ie* は先行詞と関係代名詞を兼ねた *der* に導かれる関係文中で、肯定の *immer* を意味する。

nhd. *weder ... noch* は離接的接続詞と言われるもののひとつであり、両方を否定する。この *noch* は古高ドイツ語の否定辞 *ni* と *ouh* の融合形で *auch nicht* の意味である。中高ドイツでは *weder ... noch* と並んで *noch ... noch* あるいは *noch* 単独でも同様の意味で用いられ、34) の3行目に見られる *noch* がその例である<sup>24</sup>。ただし、中高ドイツ語では両方否定と並んで、稀に *entweder ... oder* の否定に当たる場合もあるので、次にそれを挙げてみよう。

37) *ern erkante dannoch diz noch daz,*

*weder ir minne noch ir haz.* (Trist. 879f.)

彼はその時はまだ、あれかこれか、つまり彼女が好意をもっているのか、それとも敵意をもっているのか分からなかった。

以上、中高ドイツ語の否定表現についてさまざまな可能性を紹介してきたが、『ザクセン宝鑑』にそれがどのように現われているのか、序文に見られる全用例を分類して示すことにしよう。

### 3 『ザクセン宝鑑』の序文に見られる否定表現

前稿でも述べたように、この作品の冒頭に280行の序文が添えられている。これは、最初の96行が8行から成る節が12節、交差韻で表わされており、それ以後は連続する2行が押韻する対韻の韻文である。ここに前稿で見た除外文2例と *kleine* および *selden* による否定の2例を含めて、

---

24 ちなみに、同じ語形の肯定の *noch* は *nu ouh* の融合形であり、もともとの成り立ちが違うので、意味も異なる。

否定表現が37例見られる。その全用例を、適宜、中部ドイツ語で表わされているとされるレクラム版の例と比較しながら検証しよう。まず、一語による否定の用例から始めよう。

### 3.1. 一語による否定

#### 3.1.1. 否定辞のみによる否定

この作品では、中高ドイツ語作品におけるのと異なり、また、中部ドイツ語版とも異なり、否定辞は *en* が1例もなくすべて *ne* である<sup>25</sup>が、その *ne* のみによる否定は前稿で見た *ne* + 接続法による除外文2例の他に次の2例がある。

#### 38) *Allen luten ich ne kan*

*zu danke sprechen noch ne sol;* (65f.)

すべての人の気に入るように私は話すこともできないし、  
また、そうすべきでもない。

ここは *noch* があるので二つ目の *ne* は不要に思われるが、リズムの関係で加えられているのだろう。レクラム版でも *en* が入っている。我々の版では後に見るもう2個所に *noch* が4度用いられ、そこにも *ne* が現われるが、レクラム版ではそのうち1個所で *en* が欠けている。

この作品に独特の否定辞として、中高ドイツ語作品にもレクラム版にも見られない、否定辞が重なった否定の強調形 *nene* が5度見られ、単独では次のように3度現われる。

#### 39) *En klene werret me dar an,*

*des ek gebeteren nene kan:* (103f.)

私がそれを何とも改善できないのが  
いささか私の心をかき乱す。

#### 40) *wo gerne ek Got bede,*

---

25 レクラム版では逆に *ne* は1例もなく、否定辞はすべて *en* である。

Dat dit buk kunde iewelk gut man,  
unrechten luden ek it nene gan. (110-12)

この書物を善良な人が皆知ることを  
どれほど神に願いたいことか。

しかし、不正な人々にはそうはしてほしくない。

41) Got deme kargen nene gan

Scattes, den he hevet begraven: (164f.)

神は吝嗇なものには、埋蔵している  
宝物を決して与えない。

39) の 2 行目指示代名詞 2 格の *des* は、以下に述べる「間違っただがそれを教えれば、そのために悪しき事とともに大きな罪をも増すことになる」という内容を先取りする。この 3 つの *nene* はレクラム版では先の 2 例では *nicht en* と二重否定に、3 つ目は *nimmer* となっている。ところで、ここの *En klene* は否定ではなく *sehr* を意味する曲言法である<sup>26</sup>。

3.1.2. 否定語による否定

3.1.2.1. *nicht* による否定

押韻のための *nicht* の別形 *nit* の 1 例を含めて 8 度見られるこの否定語は主文で 3 度、従属文で 5 度現われる。先ず、主文の例から見よう。

42) Waz achte ich uf unrechten nit, (19)

不当なねたみなど何を気にすることがあろうか。

43) des he nicht kan gedenken; (38)

そのことに彼は想いを致すことができない。

44) Dit recht hebbe ek selve nicht irdacht, (151)

この法は私が自分で考え出したのではない。

42) は前々行の *strit* と押韻する必要からこの形になっており、43) と

---

26 武市修「『ザクセン宝鑑』に見られる表現技法——中高ドイツ語叙事作品との比較から——その1」、『独逸文学』57、65頁参照。

ともにレクラム版でも同じである。44) はレクラム版では *Diz recht en habe ich selbir nicht erdacht* のように二重否定になっている。

5 度の従属文は次のように関係文が 3 例、従属接続詞 *dat* (= *nhd. dass*) および *als* に導かれる文が 1 例ずつである。

- 45) *Swer mine lere nicht vernemet*  
*wil he min buch bescelten san*, (9f.)  
私の教えを理解しない者が  
私の書物をすぐさま非難しようとするなら、
- 46) *Des he durch recht nicht haben sol*; (23)  
法によって彼が持つべきでないとされるもの
- 47) *dat min dumme sin vermeden hat*  
*Unde dar dit buk nicht ave lere*, (144f.)  
私の愚かな理解力がうっかり見逃して  
この書物が何も教えていないような (ところに気がつけば)
- 48) *Dat min scat under der erde*  
*mit me nicht verwerde*. (155f.)  
私の宝が地下で  
私とともに滅ばないように
- 49) *Als it en to'n eren nicht missesta* (185)  
それが彼らの名誉を損なわないように

45) は序文前半に見られる不定関係代名詞 1 格 *swer* 4 例のうちのひとつで *swer* で表わされる人を、定動詞 *wil* が文頭に置かれた条件文中の *he* で受けている。46) では中性の関係代名詞 *des* が *nicht* にかかる部分の 2 格で、この *nicht* は *nichts* の意味である。47) は前置詞 *ave* と *dar ave* で *worüber* の意味で、関係代名詞の代わりをする *dar* と前文の関係代名詞 *dat* が前行の *itteswat* (*nhd. etwas*) を先行詞とする構文である。48) は目的を表わす *damit* の意味の接続詞 *dat* 文中、49) は前行の *so* に対応する従属接続詞 *als* の文中の否定の副詞の例である。

レクラム版では 44) と同様 47) も *en* と *nicht* による二重否定になっている。

3.1.2.2. neman による否定

neman (= mhd. *niemand*) による否定は次のように主文で3度、関係文で2度見られる。

- 50) Ich swige oder halde rechten strit,  
neman daz irwenden kan. (17f.)  
私は沈黙するかそれとも正当な戦いをするかである。  
誰もそれを妨げることはできない。
- 51) an rechte he nemande spare,  
De wile he spreken wille, (130f.)  
法に関しては、彼はそれを語ろうとする限り、  
誰に対しても遠慮しないように。
- 52) dat recht nemant leren kan, / Dat den luden allen /  
kunne wol bevallen. (122-24)  
すべての人に気に入るような法は  
誰も教えることができない。
- 53) Dere neman guter phlegen sol, (87)  
立派な人なら誰もすべきでない (恥ずべき復讐)
- 54) so wet mek Got unsculdich,  
Den dar neman kan bedregen, (226f.)  
しかし誰も欺くことのできない神は、  
わたしにとががないことをご存じだ。

51) の nemande は neman の別形 nemant の3格である。2行目の wille は命令や要求を表わす上位文に従属する文中なので接続法になっている。これは中高ドイツ語諸作品に見られるのと同じ現象である。52) の kunne も主文の否定に従属する関係文中の接続法で、これも中高ドイツ語と共通する用法である。ただし、この Dat (=mhd. daz) は中高ドイツ語の daz ez の融合形と同じ用法とも解釈できる。そうすると、先に例25) で見たのと同じく、本来は否定された上位文に従属する en+接続法に代わる daz 文と考えられるが、25) と違ってここでは接続法になっている。53) の dere は前行の ein scentlich rache を先行詞とする関係

代名詞である。54) の *dar* は指示代名詞を関係代名詞として転用する時に関係文であることを示すために挿入された不変化詞である<sup>27</sup>。

その他の一語で否定を表わすものには、*kleine* や *selden* (nhd. *selten*) による曲言法があるが、これについては前稿で触れた<sup>28</sup>ので、ここでは省略する。

### 3.2. 二重否定

2.2. で中高ドイツ語に見られる否定の重複について述べたが、我々の「法書」には否定語が複数用いられる用例は1例もなく、否定の重複は否定辞と他の否定語による表現のみである。それについて詳しく見ていこう。

#### 3.2.1. *ne* と *nicht* による否定

この組み合わせは次のように主文4例と従属文3例の7例見られる。先ず主文の4例から挙げると、

55) Ich ne kan de lute machen nicht

vernumftich algemeine, (5f.)

私には人々をすべて分別あらしめる  
ことはできない。

56) Nu ne kan man leider valschen mut

nicht sen, de dat ne si dar bi. (27f.)

ところが、残念ながら行為がそこに伴わないと、  
不実な心を見極めることができないものだ。

57) so ne kan he scaden mir nicht vil. (44)

そうすれば、彼は私に大した害を与えることはできない。

58) Des ne kan ek nicht bewaren, (229)

私はそれを防ぐことはできない。

---

27 前稿の例文12) にもこの *dar* が見られた。武市修 前掲書67頁参照。

28 同上書64～66頁参照。



これらの例ではレクラム版でも、ne が en になっているだけで、すべて二重否定である。58) の des は nicht にかかる部分の 2 格で nicht は nichts の意味である。次に従属文の 3 例を示すと、

- 59) wen swer so swimmen nicht ne kan,  
Wil he dem wazzere wizen daz, (12f.)  
なぜなら、泳ぎのできない者が  
それを水のせいになろうとするなら、
- 60) Se leren daz se lesen baz,  
de iz vernemen nicht ne kunnen. (15f.)  
私の書物を理解できない人は、  
もっとよく読めるように学ぶがいい。
- 61) Dat se nicht ne ruwe diu vart, (187)  
彼らがそのふるまいを後悔することがないように、

59) は例45) で見たのと同じ構文で、不定関係代名詞 swer で表わされる人を、次行の he で受け、定動詞 wil を文頭においた条件文となっている。60) は 3 人称複数数の se が関係代名詞 de の先行詞であり、動詞 leren は要求を表わす接続法であるが、従属文の kunnen は接続法かどうか形の上では分からない。61) の dat は nhd. *damit* の意味の接続詞で、動詞 ruwe は接続法現在である。se は人称代名詞複数 4 格、diu vart が dat 文の主語である。ここはレクラム版では否定辞のない単一の否定になっている。

### 3.2.2. ne とその他の否定語

先ず neman および nie との結びつきから見よう。これらはそれぞれ 3 例ずつ見られる。

- 62) So tut he daz e nie ne geschach;  
neman den luten allen  
Zu danke levete noch ne sprach; (53-55)  
そうすれば、彼はこれまで一度もなかったことをすることになる。

人は誰も、すべての人の気に入るように  
生きたことも語ったこともない。

- 63) nu set dat uch nemannes leve noch leide

Noch torn noch gift so ne blende,  
dat man uch van deme rechten wende. (148-50)

誰の愛も苦しみも怒りも贈り物も  
あなた方の目をくらませ、法から背かせる  
ことがないように気を付けるように。

- 64) en ander merket aver dar bi, / Dat nemannes mut /  
bat dar to ne stut, (212-14)

しかしその場合もう一つのこと、誰も（私）以上に次のことを  
心がけている者はないということに注意して下さい、

- 65) Min buch ne horte nie de man, / deme iz al behagete wol; (67f.)

私の書物がすっかり気に入ってそれを聞く人はいないでしょう。

- 66) Mich ziet manich man durch haz

worte, der ich nie ne gewuch; (81f.)

私が言ったこともない言葉のことで  
憎しみのために、私を非難する人も多い。

62) の3行目は noch があるので、en は不要に思われるが、強弱のリズムを取るために挿入されているのであろう。ちなみにレクラム版では否定辞をとり、gesprach として流れをよくしている。63) には離節的接続詞 noch が3度も現われている。ここも2行目の ne は不要に思われるが、ここはレクラム版でも en が残されている。1行目の set は動詞 sehen の縮約形で、56) に見られた sen の2人称複数に対する命令形である。命令文に従属する副文の動詞が blende, wende のように接続法になっているのは中高ドイツ語と同じである。64) でも同じように命令文に従属する dat 文の動詞 stut は standen, stan の ir に対する接続法過去である。

65) の deme は de man を先行詞とする関係代名詞であろうが、取り方が難しい。ヒルシュ (Hans Christoph Hirsch) は horte を過去形だとしてここに *mein buch das hörte nie ein mann, dem es wohl ganz behagte* という訳文を与えているが、これでは意味がよく分からない。これに対し

シヨット (Clausdieter Schott) は *Mein Buch wird niemals auch den Benutzer finden, dem alles in gleicher Weise behagt.* と意識しているが、*horte* も *behagete* も接続法と解しているのであろう。前後の関連からこの解釈の方が適当である。66) も関係文であり、先行詞 *worte* は2格の副詞的用法で、「言葉のことで」という意味である。ここはレクラム版では否定辞が省かれている。

最後に、強調の否定辞 *nene* がさらに *ne* とともに用いられているきわめて稀な表現を見てみよう。

67) des ne do he to hant nene klage (198)

そのことについて彼はすぐに苦情を言わないように

68) do he aver vernam,

So grot dar to des herren gere,

do ne hadde he nene were; (268-70)

しかし彼が主君のそのことに対する願いが

とても大きいのを聞き知ったとき、

彼は拒むことができなかった。

3.1.1. で *nene* が単独で用いられた例を3つ見たが、ここではそれがさらに *ne* によって強調されている。67) の *do* は動詞 *don* (=nhd. *tun*) の接続法現在で要求を表わし、名詞 *klage* を目的語に取っている。レクラム版ではこの箇所を *Des en tu her zuhant keine klage* と *en* と否定冠詞 *kein* による二重否定になっている。68) もレクラム版は同様に *do en hatte her keine were* とし、*konnte er sich nicht wehren* の意味だと注釈を付けている。

以上、この作品の序文に現われる否定表現のすべてを、一語による否定と二重否定および主文と従属文という観点から検討してきた。前稿で見た4例も含めて、今それを一覧表にして示すと、次のようになる<sup>29</sup>。

---

29 なお、ここには離節的接続詞 *noch* の4例は含めていない。それらについては本文中で言及した。

一語による否定			二重否定		
ne :	主文	2	ne + nicht :	主文	4
	接続法の除外文	2		従属文	3
nene :	主文	3	ne + nie :	主文	1
nicht :	主文	3		従属文	2
	従属文	5	ne + neman :	主文	1
neman :	主文	3		従属文	2
	従属文	2	ne + nene :	主文	2
kleine :	主文	1			
selden :	主文	1			
合 計		22			15

これらを合計して示すと、一語による否定は主文で13例、従属文で9例の22例、二重否定は主文で8例と従属文で7例の15例となる。これらの数値から見ると、一語による否定も二重否定も、独立、従属という文の種類による有意な差はないということが言える。また、レクラム版との相違をその都度必要に応じて指摘したが、それらをまとめると、レクラム版では上記の一語による否定22例中4例が二重否定に、逆に上記の二重否定15例中2例が単独の否定になっており、これらについても主文と従属文の違いも含めて、両版に有意な差があるとは言えない。

#### 4. おわりに

前稿に引き続いて『ザクセン宝鑑』の表現技法を中高ドイツ語諸作品に見られる現象と比較して明らかにすべく、本稿では否定表現に焦点を当てて検証した。比較する場合、中高ドイツ語における否定表現の全体を明らかにすることが必要となる。そこで、先ず、それについて文法書と辞書の記述を参考に、筆者が長年読み進めてきた中高ドイツ語諸作品に現われた用例を加え詳しくまとめ、中高ドイツ語における否定の特徴を明らかにした。

中高ドイツ語には、今日のドイツ語には見られない表現法が多く見られるが、とりわけ、否定に関しては二重否定が肯定にならず否定の強調になるとか、iht や ie や ieman などが副文では niht や nie や nieman などの否定を表わすことがあるとか、今日では不要と思われる否定辞がふつ

うに用いられたり、逆に、否定辞が必要なところで、それが省かれることがあるなど、極めて多様な可能性が見られる。とくに、否定辞+接続法で表わされる従属形式は冗語的な否定を含め、上位文とのさまざまな従属関係を表わし、その場合、否定辞のない表現も同じ統語関係を示すなど、否定表現にはきわめて複雑な側面がある。

それに対して、『ザクセン宝鑑』では *selten* や *klene* (= *kleine*) などによる反語的否定や否定の強調としての二重否定など中高ドイツ語と共通する現象も見られる一方で、*ne*+接続法は除外文に限られたり、複雑な統語関係を示したりすることがなく、*dehein*、*ie*、*ieman* などが否定を表わしたり、否定辞が冗語的に用いられる用例も見られないなど、文法的により明確な語法が目につく。もちろん、これはあくまでも、序文に限定しての現象なので、散文による具体的な記述を詳細に検証する必要があるが、これは今後の課題としたい。

#### テキスト

Eckhardt, Karl August: *Sachsenspiegel Landrecht*, Göttingen<sup>3</sup>1973

#### その他の参照テキスト

Gottfried von Strassburg, *Tristan*. Nach dem Text von Fr. Ranke, neu hrsg., ins Neuhochdeutsche übersetzt, mit einem Stellenkommentar und einem Nachwort von Rüdiger Krohn, 2., durchgesehene Auflage, 3 Bände, Stuttgart 1981

Hartmann von Aue, *Der arme Heinrich*. *Mittelhochdeutsch / Neuhochdeutsch*.

Übersetzt von S. Grosse, hrsg. von U. Rautenberg, Stuttgart 1993 (Reclam Nr. 456)

Hartmann von Aue (hrsg. von Fedor Bech), *Érec der wunderäre*. Leipzig: F. A. Brockhaus 1867

Hartmann von Aue, *Iwein*. Mit Anmerkungen von G. F. Benecke und K. Lachmann, 6. Ausgabe, unveränderter Nachdruck der 5., von L. Wolff durchgesehenen Ausgabe, Berlin 1966

Hartmann von Aue, *Iwein*. Text der 7. Ausgabe von G. F. Benecke, K. Lachmann und L. Wolff, Übersetzung und Anmerkungen von Th. Cramer, 2., durchgesehene und ergänzte Auflage, Berlin / New York 1974 (=Iw.)

Hartmann von Aue, *Iwein*. Aus dem Mittelhochdeutschen übertragen, mit Anmerkungen und einem Nachwort versehen von M. Wehrli, Zürich 1988

*Kudrun*. Hrsg. von K. Bartsch, neue ergänzte Ausgabe der fünften Auflage, überarbeitet und

- eingeleitet von Karl Stackmann, Wiesbaden 1980 (Deutsche Klassiker des Mittelalters = Kudr.)
- Das Nibelungenlied.* Nach der Ausgabe von Karl Bartsch, hrsg. von Helmut de Boor, 22. revidierte und von Roswitha Wisniewski ergänzte Auflage, Mannheim 1988 (= Nib.)
- Der Nibelunge Nôt.* Hrsg. von K. Bartsch, mit den Abweichungen von der Nibelunge Liet, den Lesarten sämtlicher Handschriften und einem Wörterbuch. I-II. 2, Reprografischer Nachdruck der Ausgabe Leipzig 1880, Hildesheim 1966
- Das Nibelungenlied.* Paralleldruck der Handschriften A, B und C nebst Lesarten der übrigen Handschriften. Hrsg. von Michael Batts, Tübingen 1971
- Wolfram von Eschenbach, *Parzival.* Mittelhochdeutscher Text nach der 6. Ausgabe von K. Lachmann. Übersetzung von P. Knecht, Einführung zum Text von B. Schiroke, Berlin / New York 1998 (= Parz.)
- Wolfram's von Eschenbach Parzival und Titurel.* 3 Theile. Hrsg. von K. Bartsch, Leipzig 1875-77

#### 主要参考文献

- Bäumli, F. H.-Fallone, E. M., *A Concordance to the NIBELUNGENLIED* (Bartsch-De Boor Text) Leeds 1976
- EIKE VON REPGOW: *Der Sachsenspiegel. Herausgegeben und mit einem Nachwort von Clausdieter Schott. Aus dem Mittelniederdeutschen übersetzt von Ruth Schmidt-Wiegand und Clausdieter Schott. Mit 18 farbigen und 11 schwarzweißen Illustrationen.* Zürich: Manesse Verlag 1984
- Eike von Repgow: *Der Sachsenspiegel (Landrecht).* In unsere heutige Muttersprache übertragen und dem deutschen Volke erklärt von Dr. Hans Christoph Hirsch. Berlin und Leipzig 1936
- Sachsenspiegel Landrecht und Lehnrecht.* Herausgegeben von Friedrich Ebel. Reclams Universal-Bibliothek Nr.3355. Stuttgart 1999
- 久保正幡・石川武・直居淳 訳『ザクセンシュピーゲル・ラント法』、創文社、昭和60年
- Benecke, G. F., Müller, W., Zarncke, F.: *Mittelhochdeutsches Wörterbuch* I-III; Reprographischer Nachdruck der Ausgabe Leipzig 1854-66, Hildesheim 1963 [= BMZ]
- Paul, Hermann: *Mittelhochdeutsche Grammatik*, 25. Auflage, neu bearbeitet von Thomas Klein, Hans-Joachim Solms und Klaus-Peter Wegera. Mit einer Syntax von Ingeborg Schröbler, neubearbeitet und erweitert von Heinz-Peter Prell. Tübingen: Max Niemeyer Verlag 2007 (= Prell); 19. Auflage, bearbeitet von W. Mitzka, 2. Druck. Tübingen 1966 (= Paul/Mitzka) .
- Tervooren, Helmut: *Minimalgrammatik zur Arbeit mit mittelhochdeutschen Texten.*

Göppingen 1979

武市修 『中世ドイツ叙事文学の表現形式——押韻技法の観点から——』、近代文芸社、  
2006年

付記：本稿は、科学研究費・基盤研究（C）「中世ドイツ叙事文学における表現技法の全体像を解明する」（課題番号23520410 研究代表者：武市修）の助成を受けて執筆されたものである。

Ausdrucksformen im *Sachsenspiegel*  
—— im Vergleich mit den mittelhochdeutschen  
epischen Werken ——  
Teil 2: Negationsausdrücke

Osamu TAKEICHI

Nach dem ersten Teil dieser Arbeit werden hier im zweiten Teil die Negationsausdrücke in der Vorrede des Sachsenspiegels betrachtet. Zuerst werden die Verhältnisse der Negationen in der mittelhochdeutschen Dichtung im Ganzen vorgestellt, mit Hilfe der zwei Auflagen der mittelhochdeutschen Grammatik von Hermann Paul und des mittelhochdeutschen Wörterbuchs von G. F. Benecke, W. Müller und F. Zarncke zusammengefasst. Dabei werden manche Belege benutzt, die ich bei der Lektüre der mittelhochdeutschen Werke gefunden habe.

Hinsichtlich der Negation erscheinen in der mittelhochdeutschen Dichtwerken verschiedene Ausdrucksweisen, die man heute nicht mehr findet. Zum Beispiel erscheint die Doppelnegation sehr häufig, ohne sich einander aufzuheben. *ih*, *ie*, *ieman* usw. können im untergeordneten Satz negative Bedeutung haben. Im konjunktivischen Nebensatz erscheint oft die Negationspartikel pleonastisch, während sie umgekehrt an der eigentlich nötigen Stelle weggelassen werden kann.

So kompliziert ist die Negation in der mittelhochdeutschen Reimdichtung, in der Vorrede des Sachsenspiegels hingegen ist sie viel vereinfacht, ausgenommen, dass *selten* und *klene* (=kleine) je einmal in der ironischen Negation verwendet werden und sonst exzipierende Nebensätze mit *ne* und dem konjunktivischen Verb zweimal belegt sind. Es scheint kein einziger Beleg, wo *dehein*, *ih*, *ie*, *ieman* usw. in der negativen Bedeutung gebraucht werden oder die Negationspartikel pleonastisch verwendet wird.